「我が人生思い残すことなし」(後編)

作：北郷遥斗（きたごう はると）

※ 前回までのあらすじ　＝　敗戦から50年、北海道から2人の孫を関西空港で出迎えた昭男と美子は、船で神戸の自宅へ向かった。そこは今年1月、大震災に見舞われ、見事に復興を遂げた街は一瞬にして5000人超の犠牲者と共に失われた。＝

（尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp）

４．失踪

「お父さんはまだ見つからんのか？」昭男は雄大にたずねた。「うん・・・。」雄大は元気なく答えた。そう、あれは8ヶ月前、阪神大震災の直後、実家の様子を見て来ると言って出たきり戻って来なかった。結局お父さんはここには来なかった。「あの時はそういう色んな所から救助だの炊き出しだの、ぎょうさんボランティアの人が来てほんまありがたかったで。全国から一杯募金やら薬やら服やら集まったしな。あれが無かったら多分うちらもあかんかった思うわ。」美子が涙ぐんだ。「しやけどな、この辺の土地のもんの中には人の災難を逆手に、足元見やがって、どこのか分からん水をペットボトルに入れて、1000円も2000円も踏んだくったり、家直す金を5倍も10倍も吹っ掛けて、ボロ儲けたくらんだ奴もおった。」「よそさんの人が助けてくれてんのに、ほんとは一番助け合わなあかん内輪のもんが災難にたかって、悪どいことしやがる。」「ほんま浅ましいで。わしゃ地震の被害より、そっちの方がよっぽど情けないわ。もっともそんな奴らはそれからこの辺には居れん様になったけどな。」昭男は一気に捲し立てた。「はるかちゃんどうしたん。泣いてんのか？ごめんなー。怖かったんやな。ほれ、おばあちゃんとこおいで。」と声を掛けるや否や、せきを切って泣き出したはるかを美子は膝に抱えて頭を撫でた。「よし。よし。もう泣かんでええ。大丈夫やで。ええ子やなー。」

「僕、お父さんはここに来たんだと思う。そして皆んなを助けていたにちがいない。」雄大は力強く言った。「そしたら何でいんようになったんやと思うん。」昭男は返した。「分からない。でもきっと何かあったんだ。そこで何か見たんだと思う。それで何かを感じて・・・。」そこまで答えて言葉に詰まった。「そやな、おばあちゃんもお父さんは何か考えがあったんやと思うで。」

「ほら、すき焼き煮詰まって辛らーなってしもてるわ。」薄めて最後にうどん入れるか？」美子がとりなしてると、「うどん大好きー。」はるかが声をあげた。「好きか、うどん。よし、ほんならおばあちゃんが冷蔵から取って来るわ。はるか、ちょっとこっち動いて。」「あ。僕、持って来ます。」と言ってすぐ雄大が立ち上がった。「まーおおきに。頼もしいなあ雄大は。」美子たちはあらためて孫の成長に目を細めた。「ほなそれ食べたらおじいちゃんとお風呂に入ろか？」「うん、入る。」雄大は元気に答えた。「私も」はるかも続いた。「よしよし・・・。」昭男は満足そうに頷いた。

（つづく）